

たろうつなぎプロジェクト成果展
「たろうとニッポン画わたし話」の記録

あたらしい
昔話の
つくりかた

TSUNAGI
ART MUSEUM

つなぎ美術館

津奈木の新しい
昔話のつくりかた



たろうつなぎプロジェクト成果展
「たろうとニッポン画わたし話」の記録
あたらしい昔話のつくりかた

はじめに

津奈木町のアートによる町づくりは、水俣病からの地域再生と文化的空間の創造を目指し、1984年の「緑と彫刻のある町づくり」に始まりました。その活動拠点として2001年に開館したのがつなぎ美術館です。2008年からは地域資源の再評価と文化芸術活動を担う人材の育成を目的に、社会教育事業として1年から数年おきに変わるテーマごとにアーティストを招聘しながら住民参画型アートプロジェクトを実施してきました。

2020年以降は新型コロナウイルスの影響により実行委員である住民が参集できない状況が続いたため、2022年度のニッポン画家のたろう氏を招聘して実施する「たろうつなぎプロジェクト」においては実行委員制度を休止し、プロジェクトの進捗に応じて住民に参加を呼びかける方法に変更しました。「たろうつなぎプロジェクト」では、たろう氏が津奈木町の高齢者から聞き集めた体験などをもとに五つの“新しい”昔話をつくり、津奈木町で使っていた古い襖にそれぞれの一場面を描きました。また、京都美術工芸大学の学生の作画協力を得て、五つの“新しい”昔話を津奈木町を俯瞰した風景の中に描き込んだ水墨による屏風も制作しました。コロナ禍ではありましたが、住民を始めとするさまざまな人たちと可能な限り関わりを深めながらプロジェクトを進めることができ、成果展「たとうとニッポン画わたし話」の開催と記録集の刊行に至りましたことを大変うれしく思います。

主催者

目次

04 はじめに

06 たろうとニッポン画わたし話

08 展覧会風景

18 展示作品リスト

20 プロジェクトの経過

28 〈寄稿〉来るべき山本太郎

「たろうつなぎプロジェクト」に寄せて 石倉敏明

34 たろう略歴

ふだんは本名の山本太郎として活動していますが、このプロジェクトでは昔話がテーマであることに合わせてアーティストネームを「たろう」として活動しました。この書籍の中でもそれに倣って「たろう」という表記に統一しています。

たろうとニッポン画わたし話

伝統的な日本画の技法をベースにした表現にユーモアとアイロニーを盛り込んだ現代的な“新しい”日本画でもあるニッポン画を提唱し、現代の琳派とも称されるたろうは2022年4月から津奈木町の住民とともに住民参加型アートプロジェクト「たろうつなぎプロジェクト」を進めてきました。本プロジェクトは、津奈木町で住民の体験をもとにした“新しい”昔話をつくり、その一場面をニッポン画として残し、人々に地域の記憶として語り継いでもらうことを目指しています。

新型コロナウイルスのピークの合間に町内にある特別養護老人ホームを訪ねて高齢者から自身のこれまでの体験や当時の思いを聞き取り、津奈木町の歴史や文化資源を絶妙なバランスで取り込み、つなぎの五つの“新しい”昔話として生み出されたのが『笛吹き男と130人の子どもたち』、『黄金姫（こがねひめ）』、『孝女チヨ』、『メジロ太郎』、『伍太夫どん』です。これらの“新しい”昔話は津奈木町をモチーフにしたツナギ町という架空の町を舞台にしています。津奈木町の住民の個人的な体験が地域の記憶として伝わるツナギ町は、津奈木町の過去のある時点から分岐し、ともに時を刻むパラレルワールドでもあり、それは津奈木町に潜在する無限の可能性を映し出す鏡のような存在ともいえます。つまり、つなぎの“新しい”昔話は私たちがいま立っている津奈木町とツナギ町を時空を超えて繋ぎ、より良い未来を開くための体験や才知を共有する回廊の役割も果たしているのです。

幼少期から多くの芸術家に影響を与えた石牟礼道子や渡辺京二などの文化人と過ごす機会に恵まれたたろうは、文学や歴史学にも造詣が深く、プロジェクトが始まる前の打ち合わせで“新しい”昔話のアイデアが出た際に引き合いに出されたのが、13世紀後半にドイツのハーメルンで起きたとされる出来事の伝承である「ハーメルンの笛吹き男」でした。

この伝承はグリム童話にも記録されるなど形を変えていくもののパターンが残されています。たろうが生み出したつなぎの五つの“新しい”昔話のなかの第一話『笛吹き男と130人の子どもたち』は、社会における伝承の起源と変遷を考察するうえでも示唆に富んだ「ハーメルンの笛吹き男」に着想を得ています。

今回のプロジェクトでたろうが生み出した五つの“新しい”昔話は、ニッポン画とともに百年後の津奈木町ではいったいどのように語り継がれているのでしょうか。文学と美術が織り成す新たな伝承の起源ともいえる成果展「たとうとニッポン画わたし話」の記録をご覧ください、いにしえの時代から連綿と続く現代を生きる私たちが開くべき未来について思いを巡らせていただければ幸いです。

つなぎ美術館 学芸員 楠本 智郎



1階会場入口



1階会場



1階会場《ツナギ町図屏風》



1階会場



展示作品リスト

1 階

ツナギ町図屏風

制作年: 2022年

寸法:二曲一双 各185.0×180.0cm

技法:紙本墨画

素材:水俣で漉かれた和紙を屏風に貼り込んで制作しました。

京都美術工芸大学 学生(敬称略)

岩松英里子、小掠萌花、坂口春奈、篠崎 夏、下村弥佳、鈴木孟仁、宮内駿希

(つなぎ美術館蔵)

笛吹男と130人の子供たち

制作年: 2022年

寸法:襖三面 181.0×258.0cm

技法:紙本着色

素材:津奈木町の平国会館で使用されていた古襖の上に水俣で漉かれた和紙を新たに貼り直して制作しました。

(つなぎ美術館蔵)

孝女チヨ

制作年: 2022年

寸法:襖二面 181.0×192.0cm

技法:紙本着色金彩

素材:津奈木町の平国会館で使用されていた古襖の上に水俣で漉かれた和紙を新たに貼り直して制作しました。

(つなぎ美術館蔵)

黄金姫

制作年: 2022年

寸法:襖二面 181.0×192.0cm

技法:紙本着色金彩

素材:津奈木町の平国会館で使用されていた古襖の上に水俣で漉かれた和紙を新たに貼り直して制作しました。

(つなぎ美術館蔵)

メジロ太郎

制作年: 2022年

寸法:襖二面 181.0×172.0cm

技法:紙本着色アルミ彩

素材:津奈木町の平国会館で使用されていた古襖の上に水俣で漉かれた和紙を新たに貼り直して制作しました。

(つなぎ美術館蔵)

伍太夫どん

制作年: 2022年

寸法:襖三面 181.0×258.0cm

技法:紙本着色

素材:津奈木町の平国会館で使用されていた古襖の上に水俣で漉かれた和紙を新たに貼り直して制作しました。

(つなぎ美術館蔵)

3 階

これまでの作品

たろうは熊本地震の翌年の2017年に、被災し廃棄されることになっていた屏風に人々の思い出の品々を描いて再生させるプロジェクト「熊本『ものがたりの屏風』」を発案し、出来上がった作品を島田美術館に展示しました。3階展示室ではこれら熊本地震にまつわる作品やたろうが得意としてきた現代の誰もが知るキャラクターを取り込んだ作品など過去作品の一部を紹介しました。

四季紅白幔幕図

制作年: 2009年

寸法:二曲一双 各169.0×167.0cm

技法:紙本金地着色

(熊本市現代美術館蔵)

熊本ものがたりの屏風

子供の思い出銀揉紙屏風

制作年: 2017年

寸法:二曲一隻屏風 132.5×131.0cm

技法:銀揉み紙着色

(熊本市現代美術館蔵)

熊本ものがたりの屏風

森本襖表具材料店襖

制作年: 2017年

寸法:襖二面 各178.0×90.0cm

技法:布地着色銀彩

(島田美術館蔵)

山本太郎図案 芸艸堂制作

マリオ&ルイージ図 木版画

制作年: 2015年

寸法:掛軸 66.0×30.0cm

技法:多色刷り木版画

(作家蔵)

“MARIO and LUIGI Rimpa Screen” ©Nintendo, Taro YAMAMOTO, 2015

※上記6点の作品は成果展終了後につなぎ美術館に寄贈されました。

プロジェクトの経過

ここでは一連のプロジェクトの経過を

アーティストによる文章と記録写真でご紹介します。

2021年3月14日・15日

津奈木町・水俣市内フィールドワーク

正式にプロジェクトが始まる一年ほど前に津奈木町や水俣市内などをフィールドワークしました。

津奈木町では旧赤崎小学校や達仏などアート関連の施設などを見てまわり、水俣では水俣病関連施設などに伺いました。



2022年3月15日

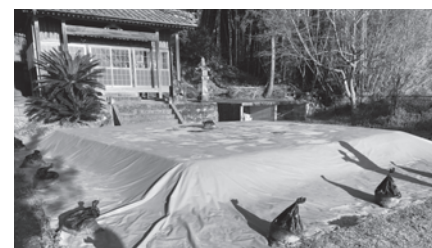
津奈木町フィールドワーク

こちらも正式にプロジェクトが始まる前にはなりますが、津奈木町を再度フィールドワークしました。

將軍神社など一年前には行けなかったさまざまな場所に伺うことで津奈木町が持つ多様な魅力を知ることができました。

海も山もあり、古くからの歴史もある津奈木町が舞台の昔話を創作するイメージの出発点となりました。

また4月の高齢者施設でのインタビューに先駆けて現役世代の女性の方々にもお話を聞くことができました。



2022年4月4日・5日・6日

高齢者インタビュー（あけぼの苑・つなぎの里）

津奈木町にある二つの老健施設の方々にご協力いただき、高齢者の方にインタビューを行いました。

84歳から98歳までの24人の方から、若かった頃の話や昔の津奈木町の話、戦争の話やさまざまな苦労話などを伺いました。

どの方のお話も大変興味深く、年月だけではなく、生きてきた時代が非常に濃密であることが窺える大変貴重な時間でした。

このとき伺った内容が新しい昔話の中に散りばめられています。



2022年7月5日

平国会館から古襖回収 津奈木中学校訪問 老健施設との打ち合わせ

平国地区の取り壊しが決まったコミュニティセンター・平国会館へ使用されなくなった古い襖を回収しに行きました。

この地区の人が一度は見たことがあるはずのこの古い襖が今回はキャンバスの代わりになります。

また、このプロジェクトに中学生も参加してほしいため中学校を訪問し先生方と打ち合わせを行いました。同じ日に老健施設のスタッフの方とも昔話の朗読についての打ち合わせも行いました。



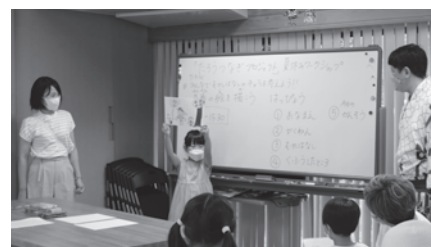
2022年8月9日

夏休み子供向けワークショップ 「昔話のキャラを作ろう」

4月の高齢者へのインタビューを元に出来上がってきた「つなぎの新しい昔話」を子供達に読み聞かせしました。

そこから受け取ったことを子供達に自由に絵に描いてもらいました。

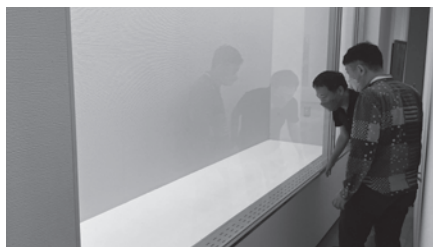
まだ私自身が作品の制作に取りかかっている時期だったので、子供達が描いたキャラクターなど大いに参考になりました。



2022 年 8 月 14 日

子供向けワークショップ取りやめ、 美術館会場視察・打ち合わせ

この日も予定していた子供向けのワークショップがコロナの関連で中止になりました。その代わり美術館で入念に展覧会の会場構成について打ち合わせることができました。



2022 年 9 月 6 日

津奈木中学校特別授業 「言葉とアートの関連性を考えよう」

津奈木中学校で 2 年生と 3 年生に向けて「言葉とアートの関連性を考えよう」という内容の特別授業を行いました。

このプロジェクトや展覧会で大事にしている言葉とアートの関連性をワークショップ形式で考えてもらいました。

絵を描くのが苦手な生徒も楽しんで取り組んでくれていた姿が本当に印象的でした。



2022 年 9 月 7 日～10 月 3 日

襖絵制作・熊本実家レジデンス

9 月から 10 月までのほぼ 1 ヶ月間、熊本市内にある私の実家でこの展覧会のメインの作品である襖絵の作品を滞在制作しました。

コミュニティセンター・平国会館からいただいた 12 面の襖に 5 つの“新しい”昔話を割り振って描くことにしました。

また、襖の表面に水俣浮浪雲工房で漉かれた和紙を新たに貼り直して作画しました。自分が昔話の話に入り込んでいくような感覚を味わい、楽しく描くことができました。

5 つの“新しい”昔話に対して 5 つの新しい作品が完成しました。



2022年10月13日～11月14日

水墨画屏風制作

京都美術工芸大学学生による作画協力

10月から11月の約1ヶ月間をかけて京都美術工芸大学の学生の力を借りて4面の水墨画の屏風を制作しました。

この屏風は5つの“新しい”昔話の舞台となる「ツナギ町」を俯瞰した風景画になっています。

つなぎ美術館の裏にある重盤岩から見える景色がベースになっているので、美術館から出ているモノレールに乗ってこの景色を一度見てもらいたいです。

作画協力してくれた学生と制作場所を提供してくださった京都美術工芸大学には大変感謝申し上げます。



2022年11月9日

新しい昔話の朗読と録音

老健施設の方々・津奈木中学校の生徒

“新しい”昔話を地元の人に朗読していただき、録音することになりました。

ご協力いただいたのは二つの老健施設の利用者の方々と津奈木中学校の生徒さんです。

中には練習を重ねて録音に臨んでくださった方もいて、どの方も大変魅力的に昔話を朗読してくださいました。

この時録音した朗読の音声は展覧会『たろうとニッポン画わたし話』の会場で流しました。



最後に

今年度の「たろうつなぎプロジェクト」はいつものつなぎ美術館のプロジェクトの運営方法と違い、実行委員制度ではなくプロジェクトの進捗に応じて住民に参加を呼びかける方法に変更されました。

当初は1年でプロジェクトを進行することはアーティストとしては若干の心配がありましたが、結果的にはそれは杞憂に終わりました。

短期間に集中して取り組むことで高いテンションを維持したままプロジェクトを進行することができました。

また、企画ごとにさまざまな世代の参加を呼びかけることで、より多くの住民の方々にこのプロジェクトに参加していただくことができました。

今はこのやり方で本当に良かったと感じています。

関わってくださった津奈木町の全ての方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

たろう

来るべき山本太郎 ——「たろうつつなぎプロジェクト」に寄せて

1. 「知られざる太郎」の魅力

山本太郎はポップでユニークな作画法を持った画家として新世紀の京都に颯爽と現れ、その後各地に活動の場を広げてきた。自ら「ニッポン画」と名乗る彼の作品世界は、日本の古典的な物語や絵画モチーフを背景にしながら、誰もが見聞きしたことのある現代の生活の情景をそこに織り込んで、時空を超えた日本のイメージを構築している。さまざまな古典文学や芸能の演目に基づく画題を、琳派の技術や方法論に基づいて描き出しつつ、そこにファーストフード店のキャラクターやコカ・コーラの缶、ジェット機の機体、家庭用掃除機といった現代のモチーフを同居させる独特の絵画は、近代の黎明期に発明された「日本画」という曖昧なジャンルを、芸能・芸術史の再解釈によって大胆に更新しようとするものだ。

彼が活動し始めた平成期は、すでにバブル経済が破綻し、日本社会が長い停滞期に突入した世紀の転換期に当たっている。その頃「ニッポン画」という言葉には、懐かしくも明るい、独特の昭和趣味が感じられていた。例えばその言葉には、かつての高度経済成長期に流行したコメディ映画「ニッポン無責任時代」のような、たとえ生活は貧しくとも未来が無根拠に明るくひらけて見えるような、未来への肯定感が残存している。民族的な誇りと未来の栄光を予感させる「ニッポン」という語彙は、東京オリンピックや大阪万博などに共通する戦後日本の好況期の雰囲気や醸成するだけでなく、平成期のサッカーやバレーボールの試合など、スポーツ観戦の場面では文化的なナショナリズムを喚起する威勢の良い語彙として、盛んに動員され続けてきた。山本は、そのようないわくつきの語彙を敢えて看板に掲げ、いわばバブル経済崩壊以後の薄暗い平成の世にあって、庶民的な肯定感に満ちた「諧謔の精神」を意図的に甦らせようとする現代アートの確信犯として、華々しい活動が続けてきたのだったⁱ。

しかし、そればかりではなかった。山本は、アトリエに籠って作画を続けるだけでなく、自ら見聞きしたローカルな現実を解釈し、それをさまざまなメディアが映し出す現代の消費文化のアイコンとともに描き出すことのできる稀有な眼の持ち主であることを、私は思い知ることになった。山本と私は2013年に秋田市内に創設された新しい美術大学（秋田公立

美術大学)に赴任し、同じ「アーツ & ルーツ専攻」という部門で学生たちを指導することになった。山本が京都市内の別の大学に移籍するまでの数年間を、私は彼と共に過ごしたのだが、偶然に同じ年齢、隣の研究室ということもあって、日常的な接点も多かったと思う。学生たちと共に、縄文時代の遺跡から過疎地の限界集落、廃村の跡地をフィールドワークしたこともあったし、時には海を超えて台湾の美術大学まで一緒に講義をしに行く機会もあった。

そんな時、山本は、人類学者である私と同じくらい強い好奇心を持って土地の歴史を調査し、地域に生きる人びとの語りに耳を傾けていた。山本が彼の「秋田時代」に参加したいいくつかの展示で見せたアプローチは、そのような取材や調査の姿勢と直結している。例えば秋田県上小阿仁村の小さな病院を取材した《土蜘蛛》では、謡曲の主題に基づく豊かな歴史的文脈を匂わせながら、高齢化や人口減少に悩む地域の医療現場を思わせる情景との絶妙なコントラストを生み出している。同様に、彼が描いた八木沢集落の番楽上演の場に掲げられる《平成版八木沢番楽幔幕》は、この地域に伝承された演目を引き立てる鮮やかな造形感覚を宿している。山本がハワイ大学のジョン・ショスタック教授との交流からハワイに滞在し、ホノルル美術館で出会った江戸時代の名画を本歌取りした《誰ヶ袖図屏風 模ホノルル本》では、原作に見られる伝統的な日本の衣装に代わってアロハシャツやレイ(花の首飾り)、ハワイアンキルト、サーフボードといったハワイに縁のあるモチーフを美しい和洋折衷のデザインで描き出し、この屏風絵が所蔵されている土地の文脈を再帰的に画面に取り込んでいる。こうした「秋田時代」の作品は、いわばローカルな現実や歴史的ルーツを相対化し、再解釈することで新たなクレオールの世界像を作り出すことに成功している。

山本太郎の作品は、日本と西洋、古典と新作、伝統と現代というわかりやすい対立軸を無効化する「ウィットに富んだ魔術性」(北澤憲昭)を確かに宿しているii。また、琳派の継承者としての山本に「西洋起源の美術」と「日本の伝統芸術」を架橋する、「新たな伝統主義」(ジョン・ショスタック)の可能性を見出すことも可能だろうiii。しかし、彼の仕事を間近で観察する機会を得た私は、洗練された「ニッポン画家」のペルソナを突き破って時折姿を表す「知られざる山本太郎」に、何度も驚かされることがあった。そ

れは、土地の人びととの協働によってイメージを生み出す物語作者としての姿であり、日本=ニッポンという国民国家の枠組みを超えてアートの生まれる現場に立ち続ける、民衆的な素朴絵の作者としての姿である。「平成琳派」ivからスタートした山本太郎は、日本画の技術に自足することなく領域を拡張し、時には泥に塗れて現場仕事を担うフィールドワーカーでもあった。華やかな場面で謡曲を披露する芸達者でありながら、時には道化のように女装した姿でキャンパスに現れて学生たちを驚かせることもあった。華やかで楽しい視覚的快楽を与えてくれるニッポン画の世界は、こういった「山本太郎という多面体」によって支えられている。私はそのような多面性を持つアーティストが研究室の隣人であったことを、いつも懐かしく思い出す。その多面性は、彼の作品の魅力そのものでもあったからだ。

2. 「たろうつなぎプロジェクト」に向かって

昭和期に育ち、平成の世に活動を開始した多くの表現者同様、山本の初期の絵画には先行する歴史的な美術作品からの引用やポップな抽象性に対する信頼と共に、時代の空虚さや軽薄さを否定的なものとするのではなくむしろ積極的に受け止めようとする気概のようなものが感じられる。しかし、「平成琳派を担うニッポン画家」という京都風のパブリックイメージがどれだけ鮮烈なものだったとしても、彼が京都という街の美大生として絵画のキャリアを開始する前の歴史を忘れてはならないだろう。平成時代の虚構性と昭和時代の懐かしい肯定性を折衷しようとするその作風の根幹には、彼の感性を培った熊本の風土を思い起こさせる強烈な何かがある。

熊本に生まれ育った山本は、家族の影響で幼少期から渡辺京二、石牟礼道子、伊藤比呂美といった強靱な思想と言語を持つ大人たちに囲まれ、交流する機会を持ってきたという。山本は、そうした環境の中で、熊本に宿る「ゲニウス・ロキ(土地の精霊)」を全身で浴びながら、彼の魂をつくり上げていったのだろう、と私は想像する。敢えてステレオタイプ化された記号を操る山本太郎の諧謔性の根底には、実は相当に骨太な批判精神と歴史的想像力が潜んでいるのだ。だから、彼がどんなにポップなアイコンを使って「かわいい」作品を描いても、土地に潜む語りへの感性が絵画的な文法を揺り動かし、新たな着想を促しているかのように感じられる。

土地の精霊の息吹、そして死者の視点を内在させること。それは中世日本に花開いた能楽の根幹にある態度でもある。山本が大学時代に能に深く傾倒し、彼の表現の中核となる思想に据えたことは、彼の絵画的主題の形成史に直結している。その根幹には、平成から令和へ、というますます強くなる時代の虚構性を超えて、自分が生まれる前の世界に存在した豊穡な物語に対する敬意と、作画によって新たな現実を切り拓こうとする革新的な意思が存在している。こうした流れを踏まえて考えてみると、熊本地方に甚大な地震が発生した2016年以後、山本がますます積極的に郷里熊本でのプロジェクトに関わるようになり、令和時代の到来と共に、津奈木町における新たなプロジェクトが始動したことはとても興味深い^v。それは、近年になって唐突に始まったものではなく、これまで彼が抱えてきた、おそらくアーティストとしての形成期における創造性の鉅脈に直結する関心事でもあるからだ。このプロジェクトは、これまで桃山時代以後に花開いた琳派との関連で語られることの多かった山本の作品を、例えば室町時代の絵巻「つきしま」（築島物語絵巻）や絵入本の「かるかや」、江戸時代に普及した大津絵や説話絵といった民衆的な素朴絵表現に近づけているのかもしれない^{vi}。

つなぎ町美術館での展示に向けて、山本はこの土地に暮らす人びとと積極的に対話するだけでなく、新作絵画に描かれるキャラクターを生み出すためのワークショップを行い、子どもたちと共に「新たな昔話」をつくり出している。それは、かつて存在した物語の断片を集め、別の新しい物語を生み出す活動でもあり、他者が想像したイメージを共有し、新たな想像力の素地を織り上げようとする行為でもある。絵画と図案の境界を超えて琳派を近代日本に甦らせた神坂雪佳を敬愛する山本が、このつなぎ美術館のプロジェクトに「山本太郎」ではなく「たろう」という別の名前で挑もうとしているのも、都市的なアーティストとしてのペルソナを脱ぎ捨て、一人の民衆作家として制作に向き合おうとする覚悟の現れと見ても良いかもしれない。

中世末期に誕生し、近世・近代・現代へと間歇的に継承されてきた琳派の美学は、江戸=東京や京都といった大都市に暮らす生活者の「粹」を反映するものであり、例えそこに優れた自然の造形感覚が込められていたとしても、洗練された「都人」の視点から切り離されることはなかった。山本が現代に問うのは、この限界を突破し、ローカルな現

実を生きる生活者の想像力と直に接触する、新たな物語的絵画の文法を探索することなのだろう。「新たな昔話をつくる」ということは、既存の説話形式に任意のキャラクターを封じ込めることでもないし、完全に自由な創意に基づく物語を築き上げることでもない。それは、異なる無数の自然条件とローカルな歴史を再発見し、そこから同時代の想像力に賦活された新たな織物を編んで、後世に伝えるということだ。熊本に生まれ育った「知られざる山本太郎」は、ここでのびのびと本領を発揮する。

つなぎ美術館という、郷里熊本の実験的な場所ではじまったこのルーツ探究の挑戦は、今後さらなる展開を見せてゆくかもしれない。「来るべき太郎」は、その場所で私たちを待ち受けている。それはもしかしたら、画家自身にとっても未知な生成の体験となるかもしれないが、「たろうつなぎプロジェクト」はその第一章と言って良い、重要な一歩となるにちがいない。今、その新たな芸術実践の扉が開かれた場所に、私たちは幸運にも立ち会っている。

i 「ニッポン画」という造語は、「日本画」という語彙に含まれる重厚な神話作用を解体し、全方位的な明るい照明のもとに晒してしまう。山本の絵画が、敢えて陰影を欠いた光の元に成立して見えるのも、戦略的な漂白によってナショナルな「日本画」とインターナショナルな「ポップアート」の捩れた関係を解体しつつも、「フラット化」に安住することなく、その果てにある多様な現実をイメージ化しようとする継続的な探究の現れでもあったのだろう。

ii 北澤憲昭「山本太郎『ニッポン画物見遊山』について」『＜列島＞の絵画 「日本画」のレイト・スタイル』所収、ブリュッケ、2015年、280頁。

iii ジョン・ショスタック『「新たな伝統主義者たち（New Traditionists）」 ― ひとつの定義』『今様 ― 昔と今をつなぐ』渋谷区立松濤美術館、2017年、14-17頁。

iv ショスタック氏は山本の絵画に見られる特徴的な流水紋に「琳派」に継承されてきた流動性と多様性の表れをみている。ジョン・ショスタック「『平成琳派』をめぐる考察」『琳派四百年記念 琳派からの道 神坂雪佳と山本太郎の仕事』所収、青幻社、2015年を参照。しかし、山本はしばしば琳派的な表現の文法を逸脱する具体的・物語的描写に突入する。そのようなときに、別の可能性を発揮しているように私には感じられる。

v 山本太郎と私は同世代であり、自己形成期に生じた関西・淡路大震災や東日本大震災に大きな影響を受けてきた。郷里の熊本における被災状況は、秋田時代の彼に大きな影響を与えた。

vi 日本民藝館編『つきしま かるかや ― 素朴表現の絵巻と説話画』、日本民藝館、2013年。

たろう略歴

1974 熊本県に生まれる
1999 ニッポン画を提唱
2000 京都造形芸術大学美術学科日本画コース卒業
2013-18 秋田公立美術大学 アーツ&ルーツ専攻 准教授
2018-22 京都造形芸術大学（現 京都芸術大学）基礎美術コース 准教授
2022- 京都美術工芸大学特任教授

主な展覧会

1999 個展「ニッポン画」複眼ギャラリー（大阪）
2007 VOCA 上野の森美術館（東京）
2008 個展「風刺花伝」新宿高島屋（東京）／京都高島屋（京都）
2009 個展「山本太郎展 ～ニッポン画物見遊山～」美術館「えき」KYOTO（京都）
2010 個展「古典 -the classics- Tales」第一生命南ギャラリー（東京）
2011 「ZIPANGU」- 31 人の気鋭作家が切り拓く現代日本のアートシーン。
-日本橋高島屋（東京）、大阪高島屋（大阪）、京都高島屋（京都）
2012 「Kamisaka Sekka: Dawn of modern Japanese design」
ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館（オーストラリア／シドニー）
2013 「The Audacious Eye: -Japanese Art from the Clark Collections-」
ミネアポリス美術館（アメリカ合衆国／ミネアポリス）
2014 「古画光臨 -Coga Calling-」日本橋高島屋（東京）
2015 「平成琳派 山本太郎×芸艸堂」イムラアートギャラリー（京都）
「琳派四百年 古今展 - 細見コレクションと京の現代美術作家 -」細見美術館（京都）
「琳派からの道 神坂雪佳と山本太郎の仕事」美術館「えき」KYOTO（京都）
2016 「IMAYŌ 今様: JAPAN'S NEW TRADITIONISTS」ハワイ大学アートギャラリー
／ホノルル美術館（アメリカ合衆国／ホノルル）
2017 「開館 40 周年記念展覧会 おもかげものがたり - 山本太郎作品と館蔵品と -」
島田美術館（熊本）

2019 個展「太郎冠者と太郎画家 茂山千之丞襲名披露記念 | 装束披露」
イムラアートギャラリー（京都）
2019 「日本の美 美術×デザイン 琳派、浮世絵版画から現代へ」富山県美術館（富山）
2020 「リニューアル・オープン記念展 I ART in LIFE, LIFE and BEAUTY」
サントリー美術館（東京）

主な受賞歴

2007 VOCA 賞
2015 京都府文化賞 奨励賞
2015 京都市芸術新人賞
2015 第六回東山魁夷記念 日経日本画大賞入選

主なコレクション

日本ケンタッキー・フライド・チキン株式会社
第一生命保険相互会社
熊本市現代美術館
Art Gallery of New South Wales（オーストラリア）
国立ヴィクトリア美術館（オーストラリア）
ミネアポリス美術館（アメリカ）
任天堂株式会社
島田美術館

1 階の会場では二つの特別養護老人ホーム、あけぼの苑・つなぎの里の利用者やスタッフと津奈木中学校の生徒による昔話の朗読を流しました。朗読にご協力くださったのは以下の方々です。(敬称略)

あけぼの苑	日野ユキエ・上原照子・前田エ子・西平ヒロ子
つなぎの里	山口享子・井手エイ子・山下ハル子・村川千枝美・ 深水心英・岡松ツネ子
津奈木中学校	渕上大翔・船場愛琳・眞野徠斗・野崎ゆな・小崎銀獅朗

関連映像



MOVIE
オープニングトーク
(ゲスト:たろう)



MOVIE
記念対談「昔話の小宇宙～むかしむかしが生まれるところ～」
(ゲスト:たろう・石倉敏明准教授、
附録:作品寄贈式)



たろうつなぎプロジェクト成果展
「たろうとニッポン画わたし話」の記録
あたらしい昔話のつくりかた

【 展覧会・プロジェクト 】

- ・たろうつなぎプロジェクト [2021 年 4 月～ 2022 年 2 月]
- ・たろうとニッポン画わたし話 [2022 年 11 月 26 日～ 2023 年 1 月 22 日]
- ・関連プログラム オープニングトーク（ゲスト：たろう）[2022 年 11 月 26 日]
- ・関連プログラム 記念対談「昔話の小宇宙～むかしむかしが生まれるところ～」
（ゲスト：たろう・石倉敏明准教授）[2022 年 12 月 11 日]

主催 つなぎ美術館（津奈木町）
協力 熊本市現代美術館、島田美術館、特別養護老人ホームつなぎの里、
特別養護老人ホームあけぼの苑、京都美術工芸大学、
虚屯出版（カラクリワークス株式会社）、UMMM
助成 公益財団法人 水俣・芦北地域振興財団

（※この事業は、水俣・芦北振興計画に基づく地域振興事業として、水俣・芦北地域振興財団の助成により実施しています。）

【 記録集 】

著者 たろう（山本太郎）、つなぎ美術館
制作 つなぎ美術館、たろうとニッポン画わたし話制作委員会
編集 虚屯出版（カラクリワークス株式会社）
発行日 2023 年 3 月 31 日 初版
発行 虚屯出版（カラクリワークス株式会社）



TSUNAGI
ART MUSEUM

〒 869-5603 熊本県葦北郡津奈木町岩城 494

TEL: 0966-61-2222 FAX: 0966-61-2223

WEB: www.tsunagi-art.jp



伍太夫どん

Ⅴ 伍太夫どん ごだゆうどん

むかし、むかし、あるところに病気が流行ったり戦が起こったりするような村がありました。

その村にひととき大きな体をして力が強い、伍太夫どんと呼ばれる男の子がいました。ある日、伍太夫どんとお母さんが乗っているバスがパンクしてしまいました。伍太夫どんはバスにロープを引つ掛けて、お母さんに乗せたまま目的地までひとりで引つ張っていききました。そのくらい、大きくて力が強かったのです。

しかし、伍太夫どんはあまりに大きく力が強かったので、村の人は恐ろしくて近寄りませんでした。伍太夫どんはそのことを密かに寂しく思っていました。

ある日この村でまた戦が起こりました。今度の戦

はひととき大きく、多くの人々が苦しみました。大人の子は戦に行ってしまう。足りなくなると男の子たちも戦に駆り出されました。残った女たちは大変な苦勞をしなければならなくなりました。

伍太夫どんは、人と人が憎しみ合う戦には行きたくありません。しかしみんなの役にたたくて、どうしようかと考えます。見た目は恐ろしくても伍太夫どんは心の優しい人だったのです。そうしている間にも度々村が戦地となり、多くの子どもがお父さんやお母さんを亡くしました。村の人たちはせめて子どもたちだけでも生き延びてほしいと色々な策を考えましたが、男たちは戦があり、女たちは日々の悲惨な暮らしに疲れ果てていました。

伍太夫どんは、親兄弟を亡くした子ども130人をバスに乗せて村から逃すことにしました。しかしバスはまたもやパンクしてしまいます。すると伍太夫どんは130人の子どもに乗せたまま、その怪力を振り絞ってバスを引つ張り走り始めました。力

の限り走って走って、ようやくバスは大きな船のある港に到着しました。そこで伍太夫どんは力尽きました。

船に子ども全員が乗ったのを見届けると、伍太夫どんはゆつくりと港に座り込みました。そのときどこからか「チーチー」と鳴き声がしました。それを聞いた伍太夫どんはもう一度力が湧いてきて、なんとか船に乗れました。

130人の子どもたちと伍太夫どんは船に乗って港を離れました。130人の子供たちと伍太夫どんを乗せた船は、近くの見知らぬ海岸にたどり着きました。最初に着いた港には大きな岩があったので少しの時間だけ留まって、その後近くにあった新しい港に停泊しました。

伍太夫どんと130人の子どもたちは互いに手を繋いで岸に降りました。

伍太夫どんと子どもたちを歓迎した港の人たちは、最初の港を「カリドマリ」、新しい港を「オオ

ドマリ」と呼ぶようになりました。そして手を繋ぐ人たちを敬ったことからこのあたりを「ツナギ」と呼ぶようになりました。今も港が見渡せるツナギの-high台には、笛吹男と伍太夫どんを祭る神社があるそうです。

こん話はこつでしゅ。





メジロ太郎

Ⅳ メジロ太郎 めじろたろう

むかし、むかし、あるところにお日さまのように美しく甘い実がたくさん採れる村がありました。

村に太郎という男の子がいました。太郎はメジロ獲りが大の苦手でした。100回メジロ獲りに行って、ただの1回も獲れないのです。太郎は101回目に挑戦してみましたがやっぱり1羽も獲れませんでした。あきめて帰ろうと立ち上がった時、一羽のメジロが太郎の上に飛んできて言いました。

「キミが失敗した101回は、101羽の仲間たちを助けたのと同じこと。キミは何があつても101歳まで生きるだろう」

そう言うときメジロはあつという間にどこかへ飛んで

ような男の子たちも駆り出され、ある者は武器を作り、またある者は武器を持ちました。ある日、太郎と友だちは二人で石や弓矢が飛び交う場面に巻き込まれました。太郎は逃げ、友だちは小さな穴を見つけて隠れました。太郎が命からがら友だちの元に戻ると、友だちは亡くなっていました。そのとき太郎はどこからか「チーチー」と聞こえた気がしました。その後、太郎は「チーチー」と鳴く声を100回聞きました。

その頃には太郎は「メジロ太郎」と呼ばれ、100歳になっていました。

そしていつからか村は流行病もなく、戦もなくなっていましたとさ。

こん話はこつでしみゃ〜。

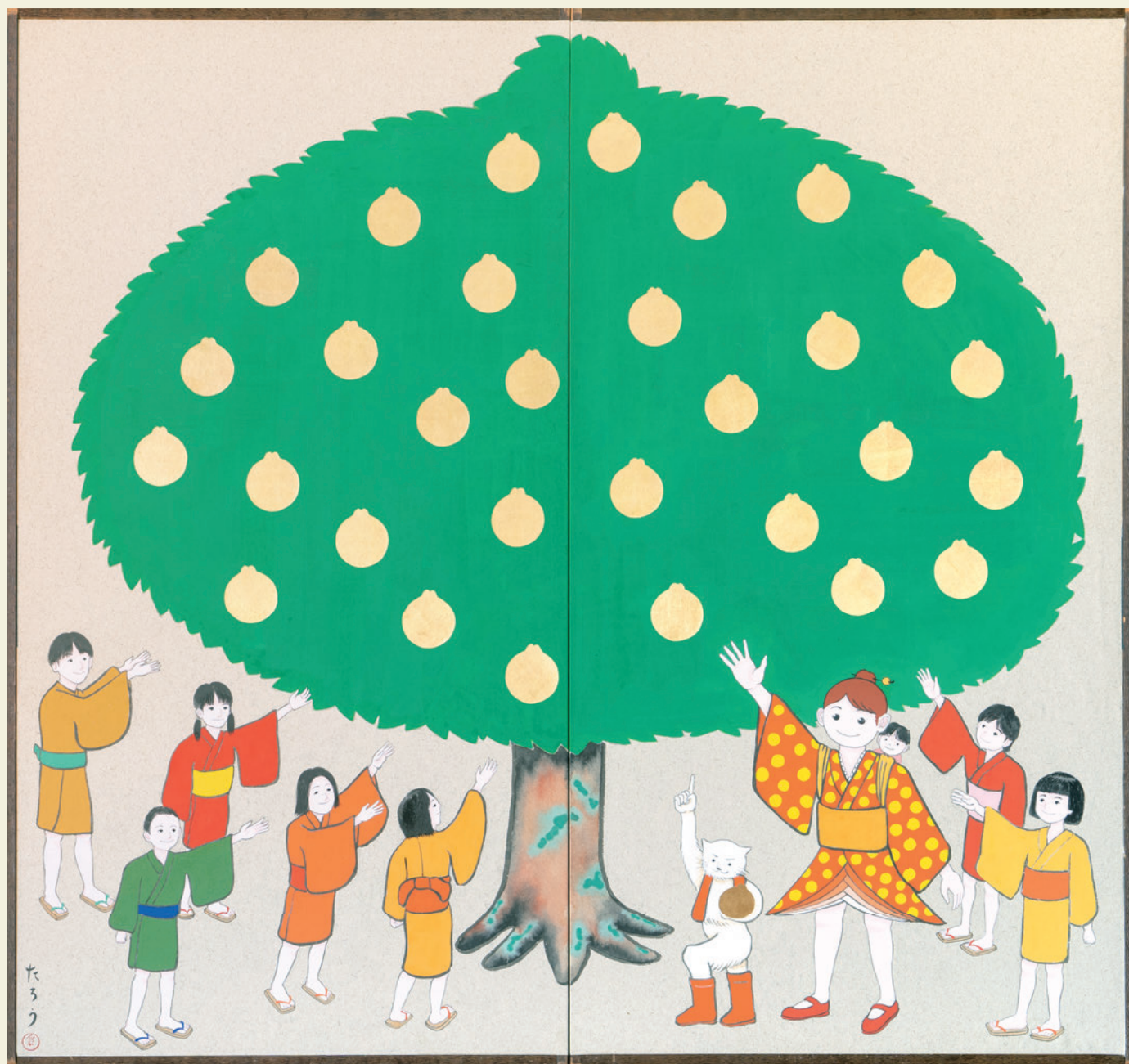
いきました。太郎は「はて、何だか不思議なこともあるもんだ」と気にも留めていませんでした。

その時でした。太郎は石につまずいて、コロコロと坂道を転がっていきました。その先は大きな池。太郎は頭からドボンと池に落ちてしまいました。泳ぎが苦手な太郎はジタバタとまがきます。万事休すと思った次の瞬間、勇敢な村人がパツと池に飛び込み太郎を助けてくれました。太郎はどこからか「チーチー」と鳴き声が聞こえた気がしました。

またある年、不思議な病気が流行ったことがありました。呼吸ができずに死んでしまう者も多くなりました。たくさんの人が罹りましたが、太郎は健康そのものでした。病気の流行が終わったとき「チーチー」と聞こえた気がしました。

またある年この村で長い戦がありました。太郎の





黄金姫

Ⅲ 黄金姫 こがねひめ

むかし、むかし、あるところに130人の子どものうちのそのまた子どもたちが暮らす村がありました。

ある日、女の子が産まりました。元気に泣くその子を抱え上げるとひととき輝く朝日に照らされたので、黄金姫と呼ばれました。お母さんは黄金姫が小さい時に亡くなってしまいました。

お父さんは黄金姫のためにと、新しいお母さんと結婚しました。新しいお母さんは別の子どもを8人連れてきました。でもいつもお酒を飲みタバコを吸っていて世話も仕事もしません。黄金姫は赤ちゃんを背負い、海で魚を獲り、畑で野菜を育てました。

が出ました。黄金姫が一所懸命に世話をするとやがて大きな木になりました。

その木は猫の言う通り、見事に130の実をつけました。黄金姫はその種をまた植えました。その種から大きくなった130の木からまた130の実が採れるようになり、その種からまたたくさんの実が採れる、という具合にどんどんたくさんの実が採れるようになっていきました。

黄金姫に育てられた8人の兄弟たちもこの実を集めるのを助けてくれるようになりました。黄金姫の夫婦と8人の兄弟たちは一緒にたくさんさんの果実を育てながら、幸せに暮らしたそうです。

こん話はこつでしみゃ〜。

ある時、猫が見たこともない美しい果実で遊んでいました。それは丸くて光り輝いていてお日さまのようでした。「その果実は何？」と聞くと、猫は「これはトキジクノカクノミと言って、クダラの隣のシラギからきた果実」と答えました。黄金姫にはすべの言葉が魔法のようでした。

猫は続けます。「わたしの祖先が130人の子どもたちとこの地に渡った時に持ってきた。この実の種をひとつ植えれば130の実になる。これはお日さまの力で育つお日さまの実、大切にすればあなたに黄金をもたらすだろう」。

黄金姫は実をひと切れ食べました。とても甘く酸っぱく、それは今までに食べたどんなものよりも美味しい果実でした！黄金姫はすぐに種を取り出して自分の畑に植えました。ほどなくして小さな芽





孝女子ヨ

Ⅱ 孝女チヨ こうじょちよ

むかしむかし、あるところに笛吹男と猫と130人の子どもがたどり着いたオオドマリという港がありました。

130人の子どもたちはそこに村を作りました。

村の暮らしはとてものどかで130人の子どもたちはすすくと育ち、いつしか大人になり結婚し子どもを産むようになりました。それからさらに何年も経ちました。

村にチヨという大変頑張り屋さんの女の子がいました。

チヨにはおじいさんとおばあさん、お父さんとお母さん、そしてお兄さんが4人いましたが、みんな

夜もいつも唐芋しか食べるものがありませんでした。

チヨがいつものように畑に向かってしていると牛ほどもある大きな黒い石が道を塞いでいました。近づくところの奥の林に入れ。この奥の林に入れ」という声が聞こえてくるではありませんか。チヨは言われるがまま、恐る恐る林の中に入りました。そこには黄金色に光る不思議な枝がありました。その枝の先端はみるみる形を変え、仏様のようにになりました。その仏様のような光る枝はチヨに言いました。

「お前はおじいさんとおばあさんのために人一倍働いていて素晴らしい。お前に毎年十俵の米を届けよう」
そう言い終わるや否や、大きな光が林の中を包み込みました。

チヨがハッと目を覚ますとそこは見慣れた道で、大きな黒い石がありませんでした。

な遠い国で起こった戦いのために死んでしまいました。そして家にはおじいさんとおばあさんとチヨだけが残されました。

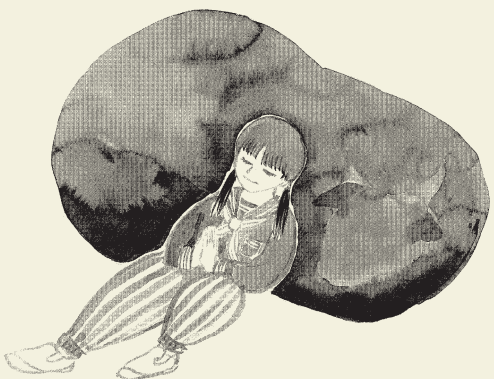
あるときおじいさんとおばあさんのお腹に白いデキモノができました。村にはこのデキモノを治せる薬はありませんでした。そしておじいさんとおばあさんは体が半分動かなくなりました。

そのためチヨは人一倍働きました。

おじいさんは歩けないので、くわ、かま、弁当、そしておじいさんを背負って畑まで行き畑仕事をしました。畑仕事が終わると、くわ、かま、空になった弁当箱と畑で採れた野菜、そしておじいさんを背負って家に帰りました。家に着くと今度はおばあさんの手伝いもしました。時間が空いた時はいつもイリコを売って回りました。それでもチヨは朝も昼も

チヨは夢でも見たと思って家に帰ると、10俵のお米が届いていました。それからチヨの家には毎年10俵の米が届き、チヨとおじいさんとおばあさんは幸せに暮らしたとき。

こん話はこつでしゅ。





笛吹き男と130人の子供たち

Ⅰ 笛吹男と130人の子どもたち

むかし、むかし、あるところに村がありました。ある年、その村に多くのネズミが出ました。ネズミは小麦や米を食い散らかしたり魚を獲る網をちぎってしまったりするので、村人たちは困り果てていました。

そんなとき不思議な音色の笛を持った男が村に現れました。その笛は海の向こうのクダラと呼ばれる国のものようでした。

その男は「わたしがこのネズミを追い払ってあげましょう。成功したら米を10俵いただきたい!」と申し出ました。しかし村人たちは半信半疑です。

ある夜、村は笛吹男の不思議な音色に包まれまし

子どもたちはどんどん数が増えて130人になり、猫や笛吹男と一緒に海の方へ向かい、その先に停まっていた大きな船に乗り込んでいきます。みなを乗せた船は、村から少し離れた別の海岸へとたどり着きました。最初に着いた港は浅くて船を停められなかったので、その先のもっと深い港に泊めました。

やがて人々は最初の浅い港を「カリドマリ」と呼び、停泊した深い港を「オオドマリ」と呼ぶようになりました。そしてそこに船をつないだことからこのあたりを「ツナギ」と呼ぶようになったということです。

こん話はこつでしみゃ〜。

た。するとどうでしょう!たちまちネズミたちが笛の音に合わせて踊り始め、やがて男の後をついていくではありませんか!笛吹男とネズミたちはシンカワまで来ると、そのままブクブクと川の中に入っていくきました。ネズミはすっかりいなくなりました。

翌日、笛吹男は約束の米10俵をもらいにきました。しかし村人はあまりに不思議なことで気味が悪く、渡しませんでした。笛吹男は「次に私が来る時にはこの村に大きな災いがもたらされるだろう!」と村を去りました。

それから数年経った頃、再び笛吹男が村に現れ村を不思議な音色で包みました。今度はまずは猫が踊り出し男の後をついていきました。さらに笛の音が大きくなると、子どもたちが踊りながらその列に加わりました。





ツナギ町図屏風

ツナギ町図屏風

I 笛吹き男と130人の子どもたち

II 孝女チヨ（こうじよちよ）

III 黄金姫（こがねひめ）

IV メジロ太郎（めじろたろう）

V 伍太夫どん（ごだゆうどん）

これはむかしむかしの物語。

とある町が舞台の五つの新しい昔話。

たろうつなぎプロジェクト たろうとニッポン画わたし話

黄金龍
きんごりゅう



たろうつなぎプロジェクト



坂太夫さん



マシロ太郎



夢次子ヨ

笛吹男と
130人の子どろたち



昔話を
新しく作って
いこう！

